

バンドン——西ジャワ・プリアンガンの町の生成と発展

村 井 吉 敬*

Bandung: The Birth and Development of a Priangan Town in West Java

MURAI Yoshinori*

Bandung, the “mother-town” (*ibukota*) of the Priangan mountain region in the eastern part of West Java, might originally have been the residential area of local powerful family (*bupati*), at about the time when a part of the Priangan people, who had been nomads, hunters or swidden farmers in natural forests, began to settle down near rivers or on open land. The residence of this local powerful family was sited in front of the town square (*alun-alun*), around which was also a sacred Hindu temple (later a great mosque), a jail and a retainers residential area. In the 17th century, Bandung was dominated by the Mataram Kingdom of Central Java, whose territorial town it became.

On the other hand, old Priangan legends such as *Sangkuriang* and *Lutung Kasarung* suggest that Priangan people had the notion of town

(*dayeuh*=region of palace) in contrast to forest, which was a terrible place but at the same time gave people a kind of spiritual power and material affluence. Without the power of the forest, the town or kingdom was thrown into confusion because of its nature of luxury, idleness or profligacy.

This small essay firstly proposes a meaning of the incident of “*Bandung Lautan Api*” (Bandung, Sea of Fire) in March 1946. After discussing the original character of Bandung as above, it then follows the process of colonization of the town. Lastly, it concludes that the town of Bandung is now characterized as a common third-world city rather than a Priangan town, because of the very deep gap between the rich and the poor, and the existence of a vast number of poor “informal sector” people.

I “火の海” に再生するバンドン

花々に飾られた白い絹のハンカチ
偉大なる南バンドンにて聖なる勝利を願った
愛の贈り物
愛情あふれる甘いことばが従ってきた
ありがとう 忘れないでと

涙がこぼれる 大切なハンカチに
指先に口づけをし 祈りを唱える
ご無事で 立派に闘ってくださいと
南バンドン 忘れずにいてください

(Ismail Marzuki 「南バンドンのハンカチ」 Saputangan dari Bandung Selatan)

クロンチョンの甘い調べに乗って流れる
「南バンドンのハンカチ」の歌は、インドネシア独立戦争時の人びとの切ない思いを、いまも代弁している。この大衆の愛唱する歌は、同時に“バンドン”という＜町＞に対するイメージをも語っているのかもしれない。

* 上智大学アジア文化研究所; Institute of Asian Cultures, Sophia University, 7-1 Kioi-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 102, Japan

ひとつはオランダ植民者たちの保養地としての“美しさ” *keindahan, pamor* のイメージであろう。誰が名づけたのか、“ジャワのパリ” *Parijs van Java* [Djajusman 1975: 11] とか、“花の町” *kota kembang* といった“美しさ”を強調する町のイメージが定着した。もうひとつのイメージは独立戦争時の、まさに“闘う”イメージである。スラバヤ *Surabaya* が1945年10月10日の、インドネシア人民の英雄的決起のゆえに、いまだに“英雄の町”であり続けているように、バンドンは1946年3月24日の“バンドン火の海事件” *Bandung Lautan Api* のゆえに、やはり独立戦争を象徴する町のひとつなのである。甘く美しくロマンに満ちたバンドンと、闘うバンドンという、なじみにくいふたつのイメージが、「南バンドンのハンカチ」の歌には込められているように思われる。

しかし、にもかかわらず、バンドンはもはや植民者たちの美しい町ではない。植民地であることへの精神的訣別こそが“火の海事件”であったはずである。

当時、バンドンを取り巻く状況は、およそつぎのようであった。45年9月29日、英印軍がジャカルタに上陸。日本軍の武器接收が始まる。インドネシア側は連合軍との本格的戦闘を予期し、ボゴール、スカブミ、バンドン、チカンベック、クラワン、ジャカルタなど、西ジャワ各地にゲリラ地帯の設定を開始した。10月5日には、スカルノ大統領が人民治安軍 (TKR, のち46年1月25日よりインドネシア共和国軍 TRI に) の編成を布告、日本軍政下で組織されたペタ (PETA, 郷土防衛義勇軍)、兵補、海軍兵補などの青年たちが軍の中核メンバーとなった。西部ジャワには三つの師団がおかれ、それぞれセラン *Serang*, リンガルジャティ *Linggarjati*, バンドンを司令部とした。プリアンガン州 *Keresidenan Priangan* を軍管区とする第3師団

の師団長は、旧ペタ大団長アルジ・カルタウィナタ *Arudji Kartawinata* 大佐であった (10月11日には旧バンドン青年団長ナスティオン *A.H. Nasution* 大佐にかわる)。人民治安軍の編成が進む過程で、日本軍とのあいだで武器をめぐる戦闘が起き始めた。スマラン、ブカシ、チカンベック、カリウンなどでは日本兵が相当数殺された [Kahin 1952: 141-146; 増田 1971: 204-210 など]。

バンドンでは人民治安軍が組織される以前にプリアンガン州人民治安団 *BKR Keresidenan Priangan* があり、正規軍以外にも、学生青年同盟 *Persatuan Pemuda Pelajar*, インドネシア共和国青年 *Pemuda Republik Indonesia*, インドネシア青年団 *Angkatan Pemuda Indonesia (API)* バンドン支部, インドネシア婦人軍 *Lasjkar Wanita Indonesia*, インドネシア人民抵抗隊 *Barisan Pemberontak Rakyat*, 強固なイスラム部隊である回教青年挺身隊 *Hizbullah*, サビリラー *Sabilillah* など、多数の人民部隊 *lasjkar rakyat* が組織されていた [Djajusman 1975: 20-23]。同時に、日本軍からの権力奪取の動きも進行していた。9月27日には、郵便・電信・電話局青年団 *Angkatan Muda PTT* が中央郵便・電信・電話局を、翌日には、鉄道局青年たちが鉄道局公会堂を、さらには鉱業局、市庁舎、州庁舎などが日本軍との戦闘なく押えられた。しかし、10月10日以降、日本軍は連合軍の意を体して、インドネシア人民の権力奪取の動きを、武器をもって封じるようになった。人民治安軍は市外に放逐されることとなり、この事件はバンドンだけでなく、各地での反日気運を一気に盛りあげることとなった。

10月12日、連合軍 (イギリス軍) が汽車でバンドンに乗り込んだ。日本軍に釈放されたオランダ軍人も加わってバンドン再占領に本格的に乗り出した。しかし、インドネシア人民治安軍や非正規諸部隊は、連合軍にあくま

でも抵抗，連日のように戦闘が起きた。11月29日，インドネシア軍と連合軍は一応の停戦協定をむすぶに至った。この協定は，バンドン市内を東西に走る鉄道線路の北側からインドネシア人が撤退することなどを内容としたものであった [ibid.: 52]。インドネシア人は“南バンドン”に追いやられたのである。

しかし，戦闘は線路をはさんで継続した。12月5日には，イギリス軍機が空から攻撃を始めた。戦闘はますます拡大していった。1946年3月22日，イギリス軍はバンドン南部掃討の命令を下し，インドネシア国軍のバンドンからの撤退の最後通告を発した。これを受けたインドネシア国軍第3師団長ナスティオン大佐は，24日24時以前にすべての住民の撤退を命令，バンドンを焼き尽くす焦土作戦 bumi hangus を決意し，鉄道線路北側にいる戦士にも最後の一撃を加えるよう指令した。

かくてバンドンは“火の海”となった。イギリス軍支配地域の北側でも，夜の9時ごろから建物の爆破が続いた。バンドンの南にある燃料貯蔵庫からは，ひととき巨大な火の手があがった。全市が真っ赤に燃え始めた。人びとは涙を飲んだ。「敗けて退くのではない。新たな力を生むために退くのだ」[ibid.: 88]。いつの日にか必ず奪い返すべきバンドンの町が，ここに誕生したのである。

ハローハロー バンドン

プリアンガンの母なる町よ

ハローハロー バンドン

わが思い出の町よ

汝とも久しく会うことなし

みよ いまや火の海

同志よ 奪い返そう

(Ismail Marzuki “Hallo
Hallo Bandung”)

この歌はバンドンの町の人びとだけの歌ではなく，ほとんどの国民の愛唱歌ともなっ

ている。それゆえ，インドネシア人にとってのバンドンは，火を放ってまで植民地主義に抵抗した，独立のシンボルとしての位置づけを与えられていることにもなる。もちろん，スカルノがかつて学び，国民党を創設し，さらに独立後の1955年の第1回アジア・アフリカ会議を開催した場所がバンドンであったことからしても，バンドンは植民地解放＝独立というイメージを人びとに十分に想起させるのである。

バンドンが植民地都市から，インドネシア共和国の都市へと生まれかわってゆく過程，とりわけ日本軍政開始当時から，共和国が実質的主権を獲得する1950年までのあいだに，バンドンの町では住民の人種構成に大きな変化が起きている。もともと植民地都市として，バンドンはヨーロッパ人（主にオランダ人）と華人の比率がかなり高かった。日本軍侵入の直前1939年の住民数は21万6,144人であったが，うちヨーロッパ人が2万6,669人（12.3%），華人が2万5,610人（11.8%）となっており（ただし，図1では出典を異にするため華人人口が若干上回っている），実に住民の4分の1近くが外国人だったのである。ところが，日本軍政が始まると，一方では，ヨーロッパ人（オランダ人）が立ち退いたり，市外の収容所に収容された結果，その数を激減させることになる。他方，インドネシア人の流入人口が急増する（図1）。その原因は，バンドン周辺のプランテーションが輸出市場を失い，そこでの就業が困難になった者たちが町に流入したこと，日本軍による米の強制的供出の結果，農村での生活が窮乏化した者が町に流れたこと，労務者の徴用を逃れるため町に出たこと，などがあったと思われる [Hugo 1978: 81; Soebardjo 1944]。

日本の敗戦を契機にして，また大きな人口流動化が起きた。日本軍に釈放されたオラン

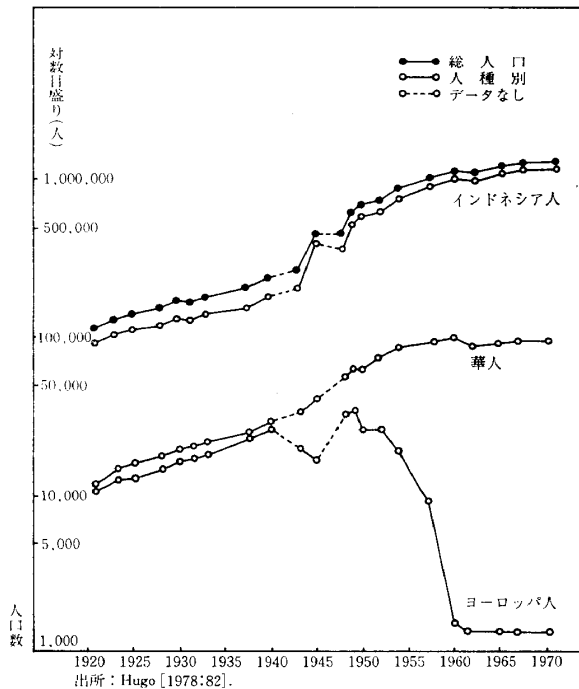


図1 バンドン市の人口と人種構成
1920～1971年

ダの軍人、市民がバンドンに舞い戻ってきたのである。軍政期間には1万人ほどしかいなかったヨーロッパ人が、45年11月には6万人にも達したという [Hugo 1978: 83]。こののちに、バンドンは線路をはさんで北と南に二分され、北にヨーロッパ人、華人、南にインドネシア人という構図ができあがる。“火の海事件”までに、北から南に移ったインドネシア人は10万人といわれ、さらに“火の海事件”をピークにバンドンの町を撤退したインドネシア人は50万人にも達するといわれている [loc. cit.]。その後、インドネシア共和国が実権を得てゆくにしたがって、インドネシア人の数が再び増え始め、逆にオランダ人は1949年をピークにして急減してゆくことになる。まさに植民地権力の盛衰が、そのままに都市の人種構成に反映されている。1950年以降、バンドンはもはや植民者の町ではなくなった。植民地残影を引きずりながらも、バンドンはインドネシア人の町であり、プリアンガンの〈母なる町〉なのである。

II 伝説のなかのバンドン

プリアンガンの母なる町と述べたが、その〈町〉とは何なのだろうか。バンドンを代表するコーラス・グループ“ビンボー” Bimbo の歌う歌に「バンドン」という曲がある。

山々につつまれしバンドン
われを守りしこの地
北に鎮座すわが守り タンクバンプラフ山
山々につつまれしバンドン
われを守りしこの地
黒猿の伝え
高き徳のしるし
愛し いとおしみ
生きし導標^{しるべ}
神の微笑みしとき
パスンダン生まれり
神々の下僕^{しもべ}の生まれしパスンダン
パラヒアンガン
神々の住まいし
パラヒアンガン

この歌自体が大流行したわけではないが、多くのスンダ人、とりわけバンドン、およびその周辺に住むプリアンガン (Priangan, あるいはパラヒアンガン Parahiangan, オランダ語表記では Preanger) 地方の人びとにとっては、この歌に歌われるバンドンに異和感をもつ者はないだろう。ここで歌われるバンドンには、およそわれわれの考える〈町〉イメージは付与されていない。ただ、バンドンを取り巻く自然、およびバンドン（ないしプリアンガン地方）に伝わる伝説とが美しく歌われているにすぎない。こうしたバンドン像は、ほかの歌（スンダ・ポップス）にもみられる。

バンドン バンドン
花の町で名高いバンドン
バンドン バンドン

サンクリアンンの伝え

山々に囲まれ 佇む人がたくさん

高貴なるパラヒアンガンの中心の町

訪ねる人はあとをたたず

(カセット・テープ“Album Nostalgia
Pop Sunda”より。作者不明)

バンドンはたしかに、四周を2,000メートル級の山々に囲まれた、盆地のなかにある。わずかに、チタルム Citarum (藍色の水) 川の流れ出す西北西の方角のみが開かれているにすぎず、700~800メートルの高原盆地がバンドンである。その盆地の大きさは、平坦な800メートル以下の土地の広さでいえば南北25キロ、東西60キロほどの規模で、バンドンの現在の町は、この盆地の北寄りの中央に位置している。人びとが大ざっぱに、あるいは歴史文化的にバンドンを考える場合、この盆地こそがバンドンなのである。

バンドン Bandung という言葉自体が地形から生まれ出た言葉であるといわれている。すなわち、その語源は bendung (あるいは bendungan) だという [Basoeni 1975; Djajusman 1975: 9]。意味は水を堰とめる membendung, ngabendung ための堰、堤防ないしダムのことである。バンドン盆地は、大昔には湖であり、Situ Hiang という名の湖だったという。Situhiang ということば自体が湖を意味するが、本来は situ が湖で、hiang は肉体の死ないし消滅、転じて天国をも意味する。したがって situ hiang とは、肉体の消滅せる湖ということである。プリアンガンの別称である Ka-hiang-an あるいは Para-hiang-an は、したがって、肉体が死ないし消滅する (ngahiang) 場所、を意味する [Satjadibrata 1950: 132, 342]。かつてバンドンの西北西の低地が、おそらく火山の爆発か何かで堰とめられて、バンドンは湖の底にあった。何らかの理由で、その堰が切れ盆地になったのがバンドンで、そこには、い

つのころから人びとが住むこととなった。このようなバンドンの生成は、プリアンガンの創世神話「サンクリアン」 Sangkuriang のなかで巧みに語られている。簡単に骨子だけを紹介しよう。

昔、パラヒアンガンの王が雌豚に小便をかけると、豚は妊娠しダヤン・スンビ Dayang Sumbi という美しい娘を生んだ。この子は男嫌いで、諸国の王からの求婚を拒み続け、トゥマン Teman という犬とだけ遊んでいた。機織りをしているとき、ダヤン・スンビは箒を落としてしまい、「女の人が拾ったら私の姉妹に、男の人だったら夫にしましょう」と独りごとをいった。すると、犬のトゥマンが拾ってしまい、彼女は犬のトゥマンと結婚するが、王は怒り娘を森に追い払ってしまった。

ダヤン・スンビと犬とのあいだに、サンクリアンなる聡明で活発な男児が生まれた。サンクリアンは森で狩りをするのが好きだった。母が所望する鹿肉を得んと森に入るが、みつからない。そこに豚が現れた。この豚はサンクリアンの祖母なのだが、それを知らぬ彼は、犬のトゥマンが豚をかばい立てするため、怒って豚でなく犬を殺し、その心臓を母にもって帰る。母は夫の肉とは知らずに食べてしまい、のちにそのことを知り、嘆き悲しみ、サンクリアンを家から追い出してしまう。

サンクリアンは森のなかで行者に会い、修行を積んで超能力を身につける。ある日、昔、ダヤン・スンビに求婚したガルガ Galuga 王に出会う。王の娘が巨人に誘拐されているときで、救い出したら娘と結婚させるという。サンクリアンは巨人を倒すが、王の約束は反古にされた。彼は怒り王を殺し、また森に入る。そこでダヤン・スンビに会う。だが、それが母であることを忘れるほど、長い年月が経っていた。サン

クリアンはこの美しい女に求婚する。母は自分が母であると名乗るが、息子は信じない。困ったダヤン・スンビは、「夜明けに鶏が鳴くまでにチタルム川に堰をつくり、大きな船を浮かべられたら結婚します」と約束する。

サンクリアンは超能力を用い、木を切り倒し、堰をつくり、船が完成しそうになった。母は焦り、森に火を放つ。鶏が、明るくなったために鳴いてしまう。サンクリアンは遅かったのだ。彼は絶望のあまり船を蹴りあげてひっくり返し tangkub perahu, なおもダヤン・スンビを追いかけたが、彼女は突然消えてしまった。

かくて、ひっくり返された船がタンクバン普拉フ Tangkubanperahu 山、ダヤン・スンビが消えたところがプトゥリ Putri 山、巨人が木を切り倒したところがブキット・トゥングル Bukittunggul 山、堰にしたところがブランラン Burangrang 山で、

このようにバンドンを囲む山々ができたのである（図2を参照）。

この神話の伝わり方には、プリアンガン地方の内部にも地域的ヴァリエーションがあるし、同様の話はカリマンタンにあるともいう [Soehenda *et al.* 1975: 20]。また、この神話をどのように解釈するかについても、インセスト・タブーが主要テーマであるとの立場もありうるだろうし [ibid.: 60-69]、ジャワのマタラム王国の勢力拡張（東部プリアンガンに成立したガルー Galuh 王国）と、それに抗せんとするスンダ人勢力との確執を読み取ろうとする歴史的解釈もありうるだろう [Adiwilaga 1975: 61-63]。

しかし、私がここで本論との関連で問題にしたいのは、森 hutan と都邑（ダユ dayeuh, すなわち王宮のあるところ）の対比である。おそらく、プリアンガンにおける町の起源を考える場合、森に対比されるものとして、ダユなる地域が重要な位置を占めると思われるからである。

「サンクリアン」と並んで、プリアンガン地方に伝わるもうひとつの著名な神話に「ルトゥン・カサルン」Lutung Kasarung（道を迷える黒猿）がある。7人の娘をもった王は、末娘プルバ・サリ Purba Sariこそが、国を平穏に治める性格の持主であると確信し、慣習にそむいて末娘を後継者に選んてしまい、自らは森

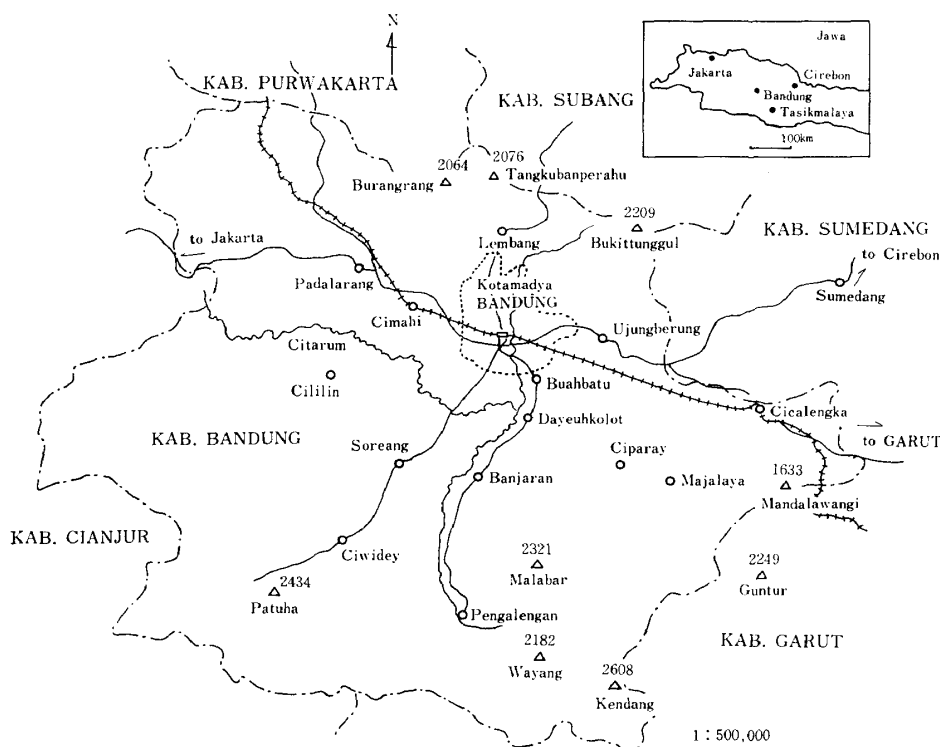


図2 バンドン市およびバンドン県

に苦行に入る。残されたプルバ・サリは姉たち、とりわけ長女のプルバ・ララン Purba Rarang の嫉妬を受け、虐待され森に捨てられてしまう。そこで彼女は、神々の住むカヒアングン Kahianggan から地上に降りてきた黒猿（グル・ミンダ）に出会う。一方、長女プルバ・ラランの王国は使者に黒猿を捕えることを命じるが、黒猿は自ら王国に出かけ、そこで大暴れをする。プルバ・ラランは思い余って、この黒猿をプルバ・サリと結婚させようとする。プルバ・サリは王国の乱れを救うためならと、黒猿との結婚を承諾する。プルバ・ラランは、その後もプルバ・サリに多くの難題をふっかけるが、すべて解決されてしまう。ついに、プルバ・ラランはプルバ・サリと恋人の男らしさを比較して、負けた側は打ち首になろうと提案する。黒猿が恋人のプルバ・サリが負け、打ち首にされんとする。黒猿がそのときプルバ・サリに寄ろうとすると、プルバ・ラランの恋人インドラ・ジャヤにうしろから剣で刺された。とたんに黒猿はみごとな男前に変身、以後このグル・ミンダを王にプルバ・サリを王妃に、王国には平穏が訪れた。これが「ルトゥン・カサルン」である [Soenarja *et al.* 1949]。

ここでも森と王宮のある場所との対比がある。森は神々の住まう“カヒアングン”により近いところ、霊なるものの宿るところ、人間にとっては恐ろしいところでもある。それに対して、王宮のあるところダユとは、どんなところだったのか。アイプ・ロシディ Ajip Rosidi は「ルトゥン・カサルン」をインドネシア語に書き起こしているが、そこでつぎのような王宮と町のような姿を伝えている [Rosidi 1962: 23, 24]。

国は商人たちが出向いてゆく中心地となり、農民たちが愛着する場所となった。商人たちはお金持で、心から楽しかった。平穏安全のうちに取引きをすることができ

た。農民たちは恵まれ、楽しんでいた。畑はとても広く、作物は立派に育った。家畜もたくさんいて、畑のなかや、1年中緑に覆われた森のなかを徘徊していた。……

王宮は都 ibukota にあり、清潔でがっちりとしたものだったので、来訪者たちはみな永くそこに住みたくなるようなところであった。都自体は亀の背の形をした丘にあった。土地はやわらかで、栽培できない作物はない。

国の威厳は宮殿に、そして町の形にみることができる。宮殿はさまざまな美しい庭園に囲まれている。空気は涼しく爽快である。建物は荘厳、堅牢、周囲の自然とマッチし、景観をさらにすがすがしくしていた。

このアイプ・ロシディの記述は史実に基づくものではなく、スンダ地方に古くから伝わる韻律詩パントゥン pantun を起こしたものであるが、国と都市と定着農村が三位一体的に発生したころの雰囲気を与えているように思われる。

もともとプリアンガン地方の農業形態は、定着農耕でなかったという。重厚な熱帯森林のなかで細々と移動焼畑農耕や狩猟を生業としてきたのが、この地方の人びとの姿であったようだ。パジャジャラン大学の農業経済学者、故アディウィラガ Anwas Adiwilaga は、スンダ人はもともと土着の民ではなく、どこから移住してきた者であり、しかも、熱帯森林帯のなかを転々と放浪する遊牧の民ではなかったかと推論している。それはもともとの居住形態をみると分かるそうだ。すなわち、スンダ人は通常、野原とか森のなかに孤立して家を建てていた。また、たとえカンボン kampung をつくっても、家と家のあいだは密着して横長に連なり、その1列と、まんなかに道路空間をおいて向かい側に同じような家並みが連なっている。これは、ひとつの家ないし、カンボンをなす家々が、また別

の場所へと移動しやすいための構造ではないかというのがアディウィラガの推論である [Adiwilaga 1975: 55]。

さらに彼は、スンダ人の農耕形態は、水田耕作ではなく、森を点々と切り開いてそこにイネを栽培する畑作民であり、水田はジャワ人によって、ないしオランダの植民地政策の結果、スンダ地方に伝わったものだという。とくにプリアンガン地方には、供出量割当制 Contingen Stelsel や、のちの強制栽培制度の重圧を逃れて、この地方に移住してきたジャワ人によって伝えられたとしている [ibid.: 57]。したがって、水田耕作が大規模に普及したのは、せいぜい19世紀になってのことと考えられる。

以上の推論が正しいとすれば、プリアンガン地方には、それほど大規模な王国や王都というものは生じる余地がなかったように思われる。もちろん、バンドン盆地においても、小規模の王都（ないし王族に連なる地方豪族の居住空間）があったであろうが、それは、ようやく、かなりの畑作空間を切り開いて定住を始めた農民たちや、商人たちに囲まれた小規模のものであっただろう。バンドンについての史実は、必ずしも明らかにされているわけではないが、通説としては1488年にパジャジャラン王国の一部として建設された（領土に入った）という [Basoeni 1975; Djajusman 1975: 10 など]。このころのバンドンは町の名前ではなく、この地方を指す名称でしかなかった。しかし、パジャジャラン王国の存在やその詳細は、不明の点が多い。そもそもパジャジャラン王国などなかったとする説もある [Adiwilaga 1975: 63] ほどであるが、ここでは立ち入った議論は差し控えよう。

もう少し確実なことは、17世紀になってからである。すなわち、マタラム国のスルタン・アグン Sultan Agung がバンドン一帯を領土とし、ブパティ bupati（豪族、のちに

行政的な意味をもつ県長ないし県知事）をおいたのが1645年（あるいは1641年4月20日との説もある [Basoeni 1975]）のことだったとされている。その豪族の支配した県 kabupaten の中心地こそが、いまのバンドンの町の始まりであるとされる。ただし、県庁は、はじめは現在の町の中心から7キロほど南のダユコロット Dayeuhkolot（古い王都の意）というところだったという。時代は一気に19世紀まで飛んでしまうが、約1808年ごろ、プリアンガン地方はオランダ植民地政府の統治下に入る。もちろん、それ以前、オランダ東インド会社 (V.O.C.) は、18世紀初頭からプリアンガン地方でコーヒーの栽培、供出をブパティ経由で住民に押しつけていた（プリアンガン制） [Burger *et al.* 1962: 101-108]。マタラムの配下に入り、オランダ植民地支配を受けるなかで、バンドンは形成されてゆくことになる。とりわけ、オランダによる商品作物の栽培強制は、プリアンガンの人びとを土地にしばりつけ、その商品作物の余剰を一部吸収するブパティをはじめとした役人（宮廷貴族）や、オランダ植民者たちこそが、バンドンを本格的な町へとつくりあげていったのである。バンドンは、プリアンガンの人びとが自生的に発展させた町ではないともいえよう。

Ⅲ 植民地都市バンドン

今日、プリアンガンの人びとが町（kota）という場合、それはバンドンだけを指す場合もあるし、自分たちの住む県の県庁所在地を指している場合もある。バンドンをはじめ、県庁所在地のような、比較的人びとが密集して家を構え、店が並び、役所のある一種の都市空間には、都市構造上の共通性があるように思われる。すなわち、中心広場 alun-alun と、その周辺の構造の共通性である。い

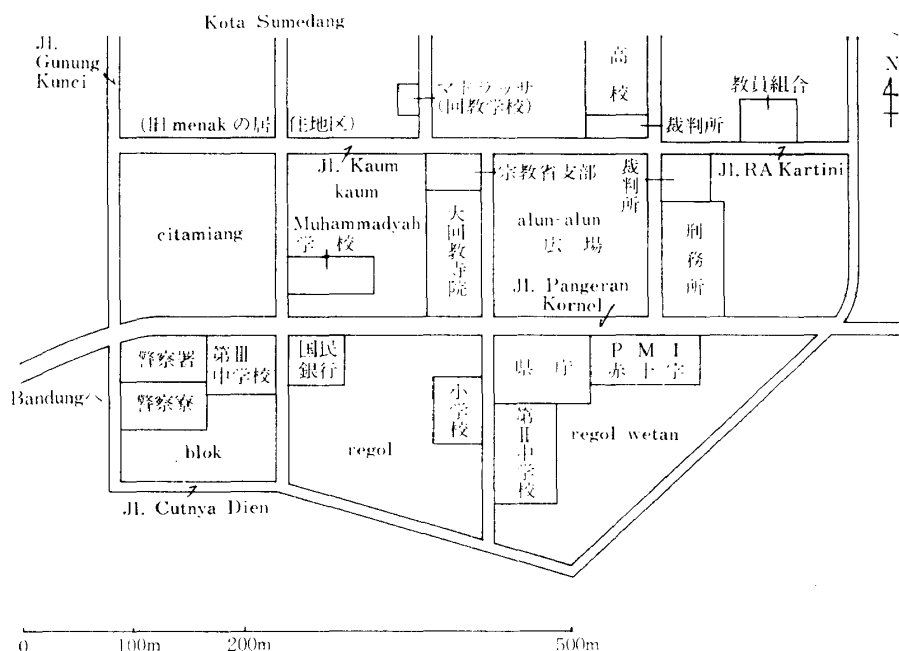


図3 スメダンの町 alun-alun の周辺

ま、その典型とも思われる、バンドンから東40キロほどのところに所在する、スメダン Sumedang の町の広場周辺の図を掲げておこう。

古いジャワの王都の場合、alun-alun をまんなかに、重要な建物が周囲に配置されているというのは、これまでもしばしば指摘されてきた通りである [Keyfitz 1961: 125; Van der Kroef 1954: 133; Wertheim 1956: 147 など]。スメダンの町の場合も同様で、alun-alun を囲んで西側に大回教寺院 mesjid agung, その向かい側に刑務所、南側には県庁がある。この現在の町がつくられたのは、おそらくオランダの支配以後のことと推測されるが、alun-alun 周辺のモデルは古いジャワのヒンドゥー都市に求めたものであろう。というのは、たとえば、回教寺院のある一面をカオム kaum と称しているが、カオムとは、もともと宗教上の指導者 penghulu agama たちの住まうところであるとされているし、またその南の一面レゴル regol というのは、ブパティの館の裏ないし側面の

カンポンであるとされ [Satjadibrata 1950: 149, 300], これは明らかにジャワの古い王都の町づくりの影響を受けていると考えられるからである。このような空間構成方法が、しかしながら町独自のもののなのかという若干の疑問が残る。プリアンガンの村（行政単位としての desa, 自然集落としての kampung ないし lembur, あるいは辺境的集落を意味する dusun などがム

ラにあたることばとしてあるが、ここでは行政単位である desa を考える）の多くは、町と似て、やはり alun-alun があり、その周囲に村役場と回教寺院を配置しているからである。したがって、空間構成（とくに中心部の広場を中心とした）の上では、町と村とを画然と区別することはできない。事実、スメダンの町は県庁所在地で、統計上は都市地域 daerah perkotaan とされているが、行政上はあくまでも村 desa からなり立っているのである。

バンドンの現在の町も、中心には alun-alun がある。その西側には大回教寺院があり、南側に県庁があるし、北側の少し離れたところには刑務所もある。モデルとしては古いジャワの都市であったことは間違いのないとしても、ここに県庁が移ってきたのは19世紀初頭、ダエンデルス Herman Willem Daendels が総督だった時代のこと、alun-alun の北側を走るジャワ横断道路の建設こそが、バンドンの現在の町のありようの基礎となっているのである。

ダエンデルスの実施した1808年から1811年までのジャワ横断（西端 アニェル Anyer から東端 パナルカン Panarukan まで）道路建設が、住民の多大の労役と犠牲を伴ったことはいうまでもない。現にバンドン―スメダン間の山岳地帯の道路建設は、多数の犠牲者を出し、労役を拒否して闘ったスメダン県のブパティ Pangeran Kusumadinata の記念碑も、同道路脇には建てられている。この植民地道路はバンドンの旧県庁のあったところよりずっと北に建設され、それゆえ県庁の移転が命じられたのである。その移転はブパティ R. A. Wiranata-Kusuma III 世 (R. Indradiredja) の手で実施され、1810年5月25日に終了したという。新県庁の周辺は当時はまだ密林に覆われていたという。旧県庁はチカプンドン Cikapundung 川とチタルム川の落ち合うところにあったが、新県庁もチカプンドン川を北に溯り、川がダエンデルスの建設した通り（今日のアジア・アフリカ通り Jalan Asia-Afrika）と交差するすぐ近くに建てられた。川の落合いや川の岸は、熱帯森林のなかでは数少ない開かれた空間であり、水を確保しやすいという地勢的理由から、町や集落が川に沿ってあるというのは今日とて同じである。

県庁を建設するにあたって、ブパティは近くの住民たちの労働力を徴用した。県庁の建設に携わった人びとは、その後、賦役 kerja rodi を免除され、それまで Kampung Balubur-hilir と呼ばれていた周辺部落が、自由部落 Kampung Merdeka と呼ばれるようになったという話も伝えられている [Djajusman 1975: 11]。

チカプンドン川沿いの新県庁を建設する際、alun-alun も当然つくられ、県庁は alun-alun の東側に建設されたという。Alun-alun の南側には大回教寺院、北側には刑務所がおかれ、のちに西側に市場 pasar がつくられた

[Anonymous 1980: 7]。これは今日の配置とは異なっている。今日、県庁は alun-alun の南側にあり、刑務所は少し離れた北側、回教寺院が西側、東側は映画街となっている。こうした方位観について、筆者はコメントできないが、ただ回教寺院を西側に配置するのは、メッカとの方角からして当然のことであり、イスラム化の深まりと、町の中心的な構造には深い関わりがあると思われる。Alun-alun の南側の道路は、今日も Dalem Kaum 通りと呼ばれる。Kaum は前述した通りだが、dalem というのは、ジャワ語でブパティやパンゲランの館を意味するというから、これもヒンドゥー・ジャワ的王都の名残りといふべきものだろう。

バンドンが町として、とりわけ植民地都市として形成されてゆくのは、おそらく19世紀後半以降のことだろう。すなわち1884年11月1日にジャカルター―バンドン間に鉄道が開通、1894年には中部ジャワのチラチャップ Cilacap、スマラン Semarang をむすぶ鉄道も完成、バンドンは単にプリアンガンの町ではなくなり、オランダ人植民者、華人、アラブ人、さらにはジャカルタからもジャワからも人が集まり、バンドンからも外に人が出てゆく時代となる。1893年 R. A. A. Martanegara がブパティに就任すると、彼は住民の住居の改善を指導したり、インフラの建設に力を注いだ [Basoeni 1975; Djajusman 1975: 11]。それまで alang-alang（萱のような雑草）で葺いていた屋根が瓦葺きの屋根に、木造家屋が煉瓦づくりの家へとかえられていった。瓦焼き、煉瓦焼きの指導もなされた。ブパティが指令したといっても、おそらくはオランダ人好みの家が上からの指令でつくられたものだろう。赤瓦、煉瓦を積んで石灰で白く固めた家、地面に直接ブロック床を敷くこの家づくりは、いまやインドネシア全土で一般化している。見映えはきれいだが、湿気の

多い土地に適したものといえるだろうか。それまで竹でつくられていた橋は木や鉄にとってかえられ、森林の開墾が進められる一方、畑地の水田化も行われるようになった。“ジャワのパリ”が、このようにして少しずつ完成しつつあった。

1906年4月1日、バンドンは市(Gemeente, のち1926年には Stadsgemeente あるいは Kotapradja)に制定された。これは1903年の地方分権法 Decentralisatiwet に基づいた措置で、行政権の一部を地方に委譲することによる植民地行政の整備といったもので、バンドンがインドネシア人の自治都市になったわけではない。事実、市長 burgemeester はオランダ人であり続けたし、市政委員会 dewan gemeente は初期には11人のメンバーのうち、インドネシア人はふたりだけだった。ただし、道路、橋、排水路、水道、ゴミ処理、消防、墓地、保健、交通などの建設、整備改善が市政発足とともに進められることになり、都市としての体裁の基盤ができたことにはなった [Pemda Kotamadya Bandung *et al.* 1975: 5-6]。蘭印政府の中央の省の一部もバンドンに本拠をおくものが出てきた。とくに、周囲を山に囲まれたバンドンは、首都ジャカルタ(バタヴィア Batavia)を後背から防衛する、天然の要塞ともいうべき場所である。したがって、陸軍省や通信省、国営鉄道はバンドンを本拠とし、軍需工場もスラバヤからバンドンに移転してきた。このようにして、バンドンは、植民地行政、防衛の後背都市としての色彩を強めてゆく。したがって、1942年3月、日本軍の侵入に際して、蘭印政府および蘭印軍最高司令部がバンドンに本拠を移していたのは偶然のことではない。日本軍政期に、バンドンはバンドン市^{バンドン}と呼ばれ、インドネシア人市長が誕生した。

バンドンは行政的には、マタラム国配下のプリアンガン豪族(ブパティ)の支配する領

域として成立し、19世紀初期にオランダ統治下に入る。バンドン県 Bandung Regentschap の県庁が現在のバンドン市のあるところに建設されたのは1810年のことで、その後1864年にバンドンはプリアンゲル理事州 Preanger Residentie の州都となり、さらに1906年に県と行政上同格のバンドン市が誕生するのである。独立後の行政上の地位としては、“火の海事件”の1946年3月24日以降、バンドン市はいわば亡命都市となり、バンドンに復帰したのは49年12月27日のオランダによる再占領の挫折ののちである。このバンドン市亡命のあいだの一時期、オランダ傀儡のパスンダン Pasundan 国なるものが生まれ、バンドンはオランダ時代の Stadsgemeente と同じ地位にされたこともあった。しかし、50年8月15日以降バンドンは大バンドン市 Kota Besar Bandung と呼ばれるようになり、さらに57年の地方行政法により Kotapradja Bandung と名前をかえ、さらに66年以降は現在の Kotamadya Bandung となったのである。Kotamadya は県と同等の2級行政区である。したがって、バンドン市は、現在、2級行政都市であり、バンドン県の県庁所在地であり、西ジャワ州 Propinsi Jawa Barat の州都でもある。

IV 第三世界都市バンドン

ジャカルタがインドネシア全体にシンデレラの夢を振りまく町だとしたら、バンドンはスンダの人びと、とくにプリアンガンの人びとに儚い夢を与えている。狭いバンドンの、そのまた狭い一角に、人びとがひしめくようになった。とくに、かつて独立闘争の火を放った南バンドンは、もはや“ジャワのパリ”ではありえぬほどの喧噪と、人びとの生きるエネルギーの渦巻く地域である。かつて古いブパティの館はチカプンドウンの川辺に、森

に囲まれひっそりと佇まっていた。だが、チカプンドゥンはいまや、もっとも活力溢れるバンドンっ子の生活の場なのである。

チカプンドゥン チカプンドゥン
バンドンの町を流れる川
花の町 美しき乙女の町 文化の中心
お前さん 他所で女なんかつくらないで
女をつくるどころか ひとり食わすのだってしんどいよ
一途の恋 醒めた恋 ごたごたの恋
一步間違えりゃ お高い鼻も丸つぶれ
一家の柱が一文なしで 恋に没頭じゃ若い
身空で証人なしの未亡人になるよ
お前さん 本当に浮気者なら
離婚させておくれ
他所に女をつくるより 弟になる末っ子でもつくって
本当にお前さん 妻や子を愛すなら
あちこち歩き回らないで
お前が寝るとき背を向けるからさ
(スンダ・ポップス “Cikapundung”)

表1 バンドン市の人口

	面積 (ha)	人口総数	インド ネシア人	欧州人	華人	その他	人口密度 (人/km ²)
1906	1,922	47,371	41,373	2,199	3,704	95	2,465
1920	2,871	94,800	79,017	9,043	6,495	245	3,302
1930	2,871	166,815	130,028	19,650	16,657	480	5,810
1939	2,871	216,144	163,865	26,669	25,610	...	7,529
1946	5,413	433,281	...	...	...	...	8,004
1951	8,098	668,140	...	...	...	...	8,251
1955	8,098	834,731	738,119	12,689	83,341	582	10,308
1961	8,098	972,566	...	...	...	...	12,010
1966	8,098	1,116,387	...	...	...	...	13,786
1971	8,098	1,200,380	1,161,029	...	37,764 ¹⁾	1,587	14,823
1978	8,125	1,294,506	1,266,616	...	(27,890) ²⁾	...	15,932
1980	8,125	1,462,637	...	...	...	...	18,002

注 1) インドネシア国籍取得者は含まれない。

2) 外国人総数。

出所: Pemda Kotamadya Bandung; Biro Pusat Statistik の統計資料; Dep. van Economische Zaken, Centraal Kantoor voor de Statistiek. 1940. *Statistisch Zakboekje voor Nederlandsch-Indië 1940*.

チカプンドゥンの川べりに、へばりつくように住むバンドンの若い夫婦一家が、ペーセスとユーモアを込めて歌われている。この家の亭主は豆腐売りかもしれないし、バナナの日婦羅売りかもしれない。スカルノが1920年代にバンドン郊外でみた、普通の農夫マルハエン Marhaen と同じような“町のマルハエン”が、バンドンの町に溢れている。否、バンドンだけでなく、ジャカルタにも、スマランにも、スラバヤにもたくさんいる。バンドンはいまや、プリアンガンの町であるより、インドネシアの、第三世界の町である。

バンドンは過去数十年のあいだ、多少の鈍化傾向が一時期あったにしても、住民の数を肥大化させてきている。1930年から80年までの半世紀のあいだに、町の人口は16万6,815人から146万2,637人へと9倍(8.77倍)近くまで増え、そのあいだの年平均成長率は4.43%であった(表1参照。ただし、面積も増えていることに注意)。独立後の51年から80年までの30年ほどのあいだでも、市の人口は2.2倍になっている。1930年から80年まで、インドネシア全体の人口規模は2.43倍、平均成長率1.80%、ジャカルタが8.02倍、4.25%であったのと比較してみても、バンドンの膨脹がいかに急速であったかが分かる。ただ61年以降、増加傾向はややゆるくなっているようにみえる。すなわち、1961～1971年までの成長率は2.13%、1971～1980年までが2.22%となっている。これはインドネシア全体の人口増加率とはほぼ同水準である。しかし、1971～1980年まで、バンドン県の年平均人口増加率は3.34%に達してい

る。この意味することは、バンドン市自体は、すでに過密化したため、市の近郊に居住する者が増えたことである。すなわち、バンドン市西部のチマヒ Cimahi, パダララン Padalarang, 南部のブアバトゥ Buahbatu, ダユコロット, ババカン Babakan, 東のウジュンブルン Ujungberung などの地域は、近年、工場建設などが相つぎ、大バンドン都市地域として考えられるべきであろう [Hugo 1978: 72]。バンドン市の1980年の人口密度は1平方キロあたり1万8,002人で、これは、ジャカルタの1万1,023人をはるかに上回っている。その意味ではバンドン市は、もはや飽和状態に近いとさえいえる。1954年3月に、バンドン市は早くも“閉鎖都市”宣言を發し、人口流入を抑えようとした（63年までその宣言は有効だった）ほどである [ibid.: 85]。

植民地都市バンドンが独立後に経験したもっとも大きな変化のひとつに、人種構成の変化があるだろう。かつて市の人口の12%, 居住面積の52%を占めるまでになった、オランダ人を主としたヨーロッパ人の存在（全インドネシアでもっとも高い人口比）[Wertheim 1956: 156] は、49年以降、急速にその重みを失ってゆく（図1参照）。バンドンの北側に居住していたオランダ人の邸宅、別荘は、インドネシア人や華人の住まうところとなり、植民地行政機関はインドネシア人の手になり、バンドンの植民者の生活を支えていた経済的後背地たるプリアンガンの農園資産も接収されていった。植民者たちの優雅な社交場だった Villa Isola は日本軍から無条件降伏を宣告された場に変じ（現在は Bumi Siliwangi と呼ばれるバンドン教育大学 IKIP Bandung の本部）、Societeit Concordia はアジア・アフリカ会議の会場となり独立会館 Gedung Merdeka と名乗るに至った（日本軍政期は大東亜会館と呼ばれていた）。

ダエンデルスの命令で建設された大郵便通り Grootpostweg はアジア・アフリカ通り、スディルマン將軍通りと名前をかえ、日本人の経営していた千代田百貨店 Toko Tjioda は Toko Tudjuh となった。バンドンに居住する外国人は、かつては全住民の4分の1近くにも達していたが、1978年にはわずか2万7,890人（インドネシア国籍の華人を除く）、全バンドン市住民の2.15%にすぎない。

だが、華人の存在は、バンドン住民にとっては、依然として微妙な感覚を与え続けている。正確な統計はないが、バンドン市にある店舗 toko 所有者はほとんどすべてが華人であるといわれる。1975年にバンドン市当局の發表した数字によれば、バンドン市に居住する中国籍住民（台湾系および無国籍者を含む）は3万4,094人、インドネシア国籍を得ている中国系インドネシア人 Warga Negara Indonesia Keturunan Tiongkok が6万7,148人となっている [Pikiran Rakyat 1975, May 21]。合計すると10万1,242人に達し、全人口の8.35%を占める。1939年当時、華人の占める割合は11.85%にまで達し、インドネシアのなかでも華人の割合がきわめて高かったのがバンドンであるが、その状況は現在もかわらない。中国籍住民の比率だけでも2.8%（1975年）で、これはジャカルタの1.2%（1974年）、チレボンの1.9%（1971年）よりも高い。

バンドンの華人たちは、“火の海事件”当時、一時的に連合軍と一緒に北側に移り住んだというが、現在ではトゥガレガ、ボジョネガラなど南部地域、駅の南のパサル・バル周辺などに居住、小売、卸売店、食堂などを經營し、最近では製造業にもかなり進出し、外国資本の合弁相手になる場合も多い。バンドン住民の華人に対する反感、不信は植民地時代に形成されたものであろうが、とりわけ独立戦争時にオランダ＝連合国側に身をおいた

との不信感が根強く残っているように思われる。独立戦争時に「華人は北の地域、イギリスの地域に逃げた」、「華人、とくに青年たちは、敵が、われわれ戦士のアジトを索敵せんとしているとき、敵に道を案内することによって恨みを晴らそうとした」[Djajusman 1975: 90, 93] などという感情がいまだに継承され、その上、華人の経済（とくに民衆にとっては日常的に接する流通部門）における支配力を妬む感情が強い。

こうした感情はときに爆発する。バンドンでは1963年5月10日と、10年後の1973年8月5日の2度にわたって（65年の9.30事件後の華人虐殺もあるが）、民衆を巻き込んだ反華人叛乱が起きている。そのきっかけは、いずれも些細なことであった。63年のときは、バンドン工科大学（ITB）の学生たちが、華人学生がオートバイ通学し、教室の席を早く占拠することに腹を立てていたことが原因で、華人学生と喧嘩を始め、それが華人店の大規模な打壊し、焼打ちにつながっていったという[Tempo 10(41)]。このとき、バンドンで始まった反華人の嵐は、スメダン、ボゴール、タシクマラヤ Tasikmalaya、ガルート Garut、スカブミの西ジャワ一帯から、ジョクジャカルタ、スラバヤ、マラン、メダンなどインドネシア各地に拡がった。1973年の“8月5日事件”は、荷馬車（ベチャともいう）と華人の運転する乗用車の衝突に始まるとされる。荷馬車の馭者が華人運転手に殴られたともいわれ、これがきっかけで、結局、1,500軒以上の華人店が被害を受け、多くの自動車、オートバイが焼打ちにされた[増田；後藤；村井 1979: 174-176; *Pikiran Rakyat* 1976, Aug. 2]。長い年月に蓄積された不信感、経済的優勢、人口比の高さ、さらにはバンドンへの貧民の流入、定住化による格差の一層の顕在化、学生・知識人都市としての伝統などの諸要因を考えると、反華人叛乱が今後は起

きないという保障はほとんどない。ただし、華人の国籍取得者の増加、2世、3世と世代を積むにしたがっての“プリブミ化”の傾向が強まってゆけば、叛乱は民族的な性格から、より階級的な方向に転じてゆくことになろう。事実、80年末の中部ジャワのソロに発した大衆的叛乱（操作されたものとみる者もいる）には、必ずしも“反華人”ではない側面も目撃されたと語っている者もいる。

バンドンはなぜ人びとを引きつけるのだろうか。オランダ植民地時代、バンドンは行政機能が集中し、また周辺の山々には多くのプランテーションが経営されていた。行政と物資の集積、流通こそがバンドンの機能であった。1930年のセンサスによれば、当時ヨーロッパ人の労働人口は6,500人ほどで、そのうちの31%が行政に携わり、27%が運輸業に携わっていた。華人労働人口5,400人のうち62%が商業に従事していた。インドネシア人48,000人ほどがオランダ人に仕え、物の生産に携わり、苦力労働をしていた。すなわち家事使用人が29%もあり、苦力が14%、運輸業が11%、工業が19%となっている。いまバンドンは行政、流通、教育の町になっており、行政を担うのがオランダ人でなくインドネシア人になったこと、教育を受ける人口がきわめて多くなったことが町の変化である。もちろん、バンドン市郊外には、外国資本や華人資本による比較的大きな工場ができて（とくに日系繊維工場が目につく）。しかし、就業構造でみるかぎり（表2参照）、バンドンの町は少しも“工業化”していない。

1956年にバンドンにおける労働人口は33万8,200人（うち失業者2万4,200人、失業率7.2%）と推計されている[Direktorat Tenaga Kerdja Kementerian Perburuhan R.I. 1958: 580]。これに対して15年後の1971年の労働力人口は32万861人（失業者5万8,104人、失業率18.11%）で、就業者数が

表2 バンドン市の産業部門別就業構造

	1956年 ¹⁾		1971年 ¹⁾	
		比率		比率
農 林 漁 業	12,200	3.9	6,514	2.0
鉱 業	—	—	576	0.2
製 造 業	57,200	18.2	40,735	12.7
電気・水道・ガス	4,000	1.3	3,115	0.9
建 設 業	13,300	4.2	12,534	3.9
運 輸・通 信	31,400	10.0	26,813	8.4
商業・レストラン・ホテル	69,600	22.2	72,668	22.7
金融・保険			4,019	1.3
公共および個人サービス	126,300	40.2	113,671	35.4
そ の 他	—	—	40,216	12.5
合 計	314,000	100.0	320,861	100.0

注 1) 56年の数値には失業人口は含まれていない。
 出所: Direktorat Tenaga Kerdja Kementerian Perburuhan R. I. [1958: 592]; Biro Pusat Statistik. 1974. *Sensus Penduduk 1971; Penduduk Jawa Barat*.

かえって減ってしまっている。56年の労働省の推計はサンプル調査であったこと、その他の理由で不正確さがあるかもしれないが、それにしても、製造業従事者が減り、失業者が大幅に増加した以外に、きわ立った就業構造の変化はないのである。バンドン周辺に建設されている工場についての統計を71年につけ加えても、おそらくそれほど顕著な変化とはならないだろう。

行政部門に落ちる開発資金、新たに建設された大規模工場への投資、全国から教育を受けにくる子弟の落とすカネ、ジャカルタに住む大金持が別宅をもつことによって落とすカネ、おそらくこれらのカネがバンドンを大きく支えており、周辺部農村地帯からの出稼ぎや、バンドンに定住する零細な第3次産業従事者は、それらのカネのおこぼれに与かろうと必死に生きているのだろう。バンドンで1971年に教育を受けている者の数は18万

9,082人で、これは10歳以上の住民の22.8%に達する。バンドンには短大卒以上の学歴を有する者が2万人近くいる。これは西ジャワ州全体の短大卒以上の者の53%を占めることを意味する。バンドンはその意味で、教育の町、文化の町とも呼ばれているのだろう。学歴を有するエリート行政官、軍人、教員、高学歴候補者、そして華人が君臨する町がバンドンの半面なのである。

バンドンは学生運動の震源地的役割をこれまで果たしてきた。78年にスハルト大統領三選に反対して学生らが起ちあがったことは、まだ記憶に新しい[増田; 後藤; 村井 1979: 189-198]。バンドン工科大、バンドン教育大、パジャジャラン大など国立大学以外にも、パラヒアンガン大、バンドン・イスラム大などの大学が集中するバンドンには、全国のエリート候補者が集まってくる。あらゆる思想潮流がそこにはある。学生運動全般の退潮が伝えられるが、バンドンが全国に門戸を開いているかぎり、そこは引き続き学生運動の中心地であり続けるだろう。

しかし、こうしたエリートたちとは別に、多くの住民はチカプンドゥンの川べりや南部の地域に密集して住み、きわめてささやかな生業を営んでいる。筆者が数年前に行った、バンドンの町の民衆生業従事者は、カネになりそうなありとあらゆる合法、非合法の生業を営んでいる。もっとも多いのは行商、露天商の類、飲食物、生活用品など何でも商う。ほとんど資本を要さぬ零細商業である。キオスクやワルン(雑貨販売兼飲食店)をもてれば上の部類である。ついで、輪タク(ベチャ)の運転手とか、乗合いミニバス(コルトとかベモ、ホンダと称す)の歩合給の運転手、その助手(ケネ)、さらには客引き(チャロ)など、運輸業に個人として携わる者も多い。建設労働者や工場の日雇い労働者も、身分の保証されぬ不安定な職業であり、賃金が

安いという意味で民衆生業従事者の仲間である。正確な統計はないが、おそらく労働人口の半数ないしそれ以上の者が、営業時間も営業場所も一定でなく、きわめて少額資本だけを投資し、ほとんど専門的技能を要さぬ民衆生業従事者であるといえよう。

彼らはバンドン市の正規の住民でない場合も多い。筆者の調査では、65人のうち20人だけがバンドン市出身者で、35人は近県の出身者、他州出身者は10人にすぎない（うち中部ジャワが6人）。これらの人びとにはバンドンより東のプリアンガン地方の者が多い。とりわけガルート、タシクマラヤ、チアミス Ciamis の出身者が多い。農村の側から押し出す要因として、農村の貧困が基本的にあるが、バンドンとの関係で見逃せぬ事実は、東プリアンガン山地が1950年代にダルル・イスラムのゲリラ活動の本拠地となったことである。毎年1,500人が死に、9,000軒の家が破壊されたとの推計もある [Hugo 1978: 84]。それゆえ、故郷の村を棄てバンドンに逃げた人は相当数に達したという。60年以降、バンドンの人口が一時的に減少傾向をみせている（図1）が、これはダルル・イスラムの活動が終熄したため、バンドンから再び故郷に戻った者が多かったことを物語っている。

民衆生業従事者たちは、故郷の村とかなり強い紐帯をもっている。ある者がバンドンで成功すると、それを頼りに同郷者、親せきの者が出てくるという構造がある。農繁期や断食明け大祭（レバラン）に帰郷する者も多い（詳しくは村井 [1978: 57-79]）。

民衆の世界のバンドンは、やはりプリアンガンの母なる町である。村からすぐに行けるところである。安心して往復できるところでもある。彼らはコタ（町）を必ずしも親しめるところだとは考えていないように思われる。食うためにやむを得ず住むなり、出稼ぎにゆくところが町であると考えているのでは

ないだろうか。バンドンの町に住むエリートや高等教育を受けているエリート候補者にとって、バンドンはプリアンガンの町というより、インドネシアの町である。

いまエリート行政官は、バンドンの町を植民者のつくった“美しい町” kota indah に戻したがっている。1975年にバンドンにベチャ乗入れ禁止ゾーンが設定された。そのとき市長は語っている。

「バンドンの町は美しくあらねばなりません。美しいというのはゴミ屑がなくて美しいというだけではないのです。不屈きな行いが無いということも意味しなければなりません。最近私は、しばしば不屈きな振舞いをするベチャ屋の話を聞きます。……ベチャ屋諸氏は、身ぎれいな格好をし、美しく、ていねいで、親しみある言葉遣いをして欲しいものです」 [Pikiran Rakyat 1975, May 23]。

バンドンの南に住む貧しい人びとは、ほとんどゴミ屑扱いされている。狭い住居、不衛生、交通の麻痺、犯罪などは、すべて貧民自身の責任であるかのような都市政策が、ジャカルタやその他の都市で立てられ実施されている。バンドンも例外ではない。バンドンに住む貧民たちは、バンドンをプリアンガンの母なる町と考え、古い“パジャジャラン”の時代の、自然に囲まれた豊かで平和な王都を心の片隅に思い、カネの稼げる現代の町で汗しているのかもしれない。だが、彼らが金持エリートに対するものとして極端に貧しく、劣悪な環境に住まい、その日暮らしの不安定な存在であるという意味においては、彼らはプリアンガンの町の住民である以上に、第三世界の大都市貧民層なのである。

むすびにかえて

プリアンガンの母なる町バンドンは、古くは、この山岳と森林の地帯で狩猟、遊牧、移

動農耕をしていた人びとが、畑作農耕民として定着し始めたところに、地方豪族の住まう地域として生まれてきたものであろう。その小さな都邑に住む豪族は、他のプリアンガンの町と同じように、自分の館の前に広場 alun-alun を設け、聖職者や役人たちを近くに住まわせた。ヒンドゥー的な空間構成の観念が支配的であったように思われる。17世紀にはプリアンガンの一帯に、ジャワのマタラム国の勢力が浸透し始め、バンドンの町もスルタン・アグンの認めるブパティの所在地となっていた。一方、プリアンガンの古い伝説や韻律詩 pantun は、ジャワ勢力の侵入との闘いも伝えているが、同時に、森と都邑、あるいは森と開かれた定住空間の対比をも伝えている。森は畏怖すべき地帯ではあるが、そこは母の住まうところであったり、霊的な力 sakti を与えてくれるところでもある。都（ないし国）が乱れるときには、肉体が消滅（そして再生）する地 kahiangn（転じて priangan）で苦行をする。だから都邑とは、霊的な力とおそらく生産力の源泉である森に守られてはじめて存在できる地域である。都邑は放っておけば華美、怠惰、放蕩に堕すところでもある。これが、古いプリアンガンの人びとの、町に対する考えではなかっただろうか。

いまのバンドンの町の基礎は、19世紀のはじめにオランダ領東インドの総督ダエンデルスが、ジャワ横断道路の建設をしたことによってつくられた。バンドンは植民者たちの避暑地として、プリアンガンの山々の広大な農園の生産物集積地、管理地として、そして首都を守る防衛後背地として、植民地都市にかえられてしまう。バンドン住民の4分の1近くがオランダ人と華人、居住環境のよい町の北側はオランダ人が占拠し、物資の流通を華人が握り、インドネシア人は“召使い”、“苦力”にされる。

バンドンは1930年からの50年間に、住民の数を9倍にも増やし、ジャカルタ以上の過密都市となっている。“ジャワのパリ”、“文化の町”、“花の町”には、独立後、新しい主人たちが君臨するようになった。

1946年の“バンドン火の海事件”のとき、バンドンは独立インドネシアを象徴する町であった。プリアンガンの貧しい民と共和国エリートが、火を放つことにおいて、ともに燃えた。プリアンガンの母なる町と共和国の独立の町とが、そこで閃光を発した。町には大きな可能性が込められた。

だが“奪い返し”で30年、バンドンには、また北と南の一線が引かれてしまった。また、プリアンガンの民と共和国エリートのあいだに、大きな溝ができてしまった。かつて植民地時代にオランダ人の“召使い”や“苦力”だったバンドンの住民は、いまは別の“召使い”になってしまったといったら言い過ぎだろうか。プリアンガンの人びとの口ずさむ子守歌は、貧しい民の子らにとっては見果てぬ夢でしかないのだろうか。

Neng nengkung nelengnengkung
Geura gede geura jangkung
Geura sakola ka Bandung
Geura makayakeun indung

ネン ネンクン ネレンネンクン
早く大きくなれ 早く高くなれ
早くバンドンへ学びにゆけ
早く母を幸せにしておやり

謝 辞

本小論執筆にあたっては、バンドン在住のスンダ人作家 Saini K. M. 氏から貴重、有益な数多くの示唆をいただいた。また、東京外国語大学留学中のスメダン出身の Jonjon Johana 氏からも助言、助力をいただいた。ここに深甚なる謝意を表したい。

文 献

- Adiwilaga, Anwas. 1975. Beberapa Catatan tentang Penulisan Sejarah Jawa Barat sekitar Permasalahannya. In *Sejarah Jawa Barat: Sekitar Permasalahannya*, edited by Atja, pp. 52-72. Bandung: Proyek Penunjang Peningkatan Kebudayaan Nasional Propinsi Jawa Barat Bandung.
- Bezemer, T. J. 1921. *Beknopte Encyclopaedie van Nederlandsch Indië*.
- Burger, D. H.; and Atmosudirdjo, Prajudi. 1962. *Sedjarah Ekonomis Sosiologis Indonesia*. Vol. 1. Jakarta: Negara Pradnja Paramita.
- Djajusman. 1975. *Bandung Lautan Api*. Bandung: Angkasa.
- Hugo, Graeme J. 1978. *Population Mobility in West Java*. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.
- Indonesia, Badan Koordinasi Pembangunan Daerah Tingkat I Djawa Barat. 1965. *Sedjarah Perkembangan Daerah Djawa-Barat tahun 1945-1965*. Bandung: Badan Koordinasi Pembangunan Daerah Tingkat I Djawa Barat.
- , Biro Pusat Statistik. *Sensus Penduduk 1961; Sensus Penduduk 1971; Survey Biaya Hidup Bandung 1977/1978; Penduduk Indonesia 1980 menurut Propinsi dan Kabupaten/Kotamadya*.
- , Kementerian Penerangan. 1953. *Republik Indonesia, Propinsi Djawa Barat*. Jakarta: Kementerian Penerangan.
- , Pemda Kotamadya Bandung; and P. T. Karya Nusantara Cabang Bandung. 1975. *Peta dan Petunjuk Nama-nama Jalan Kota Bandung*. Bandung: Karya Nusantara.
- ジャガタラ友の会 (編). 1978. 『ジャガタラ閑話』 東京: ジャガタラ友の会.
- Kahin, George Mc. 1952. *Nationalism and Revolution in Indonesia*. Ithaca: Cornell University Press.
- Keyfitz, Nathan. 1961. The Ecology of Indonesian Cities. In *Changing South-East Asian Cities: Regarding on Urbanization*, edited by Y. M. Teung and C. P. Lo, pp. 125-130. Singapore: Oxford University Press.
- 増田 与. 1971. 『インドネシア現代史』 東京: 中央公論社.
- 増田 与; 後藤乾一; 村井吉敬. 1979. 『現代インドネシアの社会と文化』 東京: 現代アジア出版会.
- 村井吉敬. 1978. 『スンダ生活誌——変動のインドネシア社会』 東京: 日本放送出版協会.
- . 1982. 『小さな民からの発想; 顔のない豊かさを問う——』 東京: 時事通信社.
- Rosidi, Ajip. 1962. *Purba Sari Aju Wangi (Lutung Kasarung)*. Jakarta: Pustaka Jaya.
- Satjadibrata, R. 1950. *Kamoes Soenda-Indonesia*. Jakarta: Balai Poestaka.
- Soebardjo, R. Achmad. 1944. *The Life Conditions of the Population with regard to the Requisition of Paddy by the Government*. Jakarta. 7pp. (Mimeographed)
- Soehenda, Iskar; and Didi, Suryadi. 1975. *Sasakala Sangkuriang: Sebuah Penelitian Folkloristik dari Daerah Sumedang*. Bandung: Lembaga Kebudayaan Universitas Padjadjaran.
- Soenarja, R. T. A.; and Wiradihardja M. A. 1949. *Sandiwarra Loetoeng Kasaroeng*. Bandung: Oisser & Co.
- Van der Kroef, J. M. 1954. *Indonesia in the Modern World*. Part 1. Bandung: Masa Baru.
- Vereeniging voor Locale Belangen. 1930. *25 Jaren Decentralisatie in Nederlandsch-Indië*. Weltevreden.
- Wertheim, W. F. 1956. *Indonesian Society in Transition*. Bandung: Sumur Bandung.
- [雑誌論文・新聞記事]
- Anonymous. 1980. Yang Molek di Bandung Selatan. *Media Wisata Jawa Barat* 5(4): 7-8.
- Basoeni, Didin D. 1975. Dari Kata Bendung jadi Kota Bandung. *Pikiran Rakyat*. April 1, 1975.
- Bersihkan Diri dari Perbuatan Tercela. *Pikiran Rakyat*. May 23, 1975.
- Indonesia, Direktorat Tenaga Kerdja Kementerian Perburuhan R. I. 1958. Laporan Penelitian Angkatan Kerdja Berdasarkan Sample Kota Besar Bandung. *Ekonomi dan Keuangan* 11(10): 571-599.
- Jawa Tengah, Normal Kembali. *Tempo* 10(41), Dec. 6, 1980: 12-14.
- 村井吉敬. 1979. 「インドネシアの民衆生業」『アジア研究』24(4): 57-82.
- Pengemudi Beca yang Terlibat Peristiwa 5 Agustus Diadili. *Pikiran Rakyat*. Aug. 2, 1976.
- Wanita WNI Cina di Kota Bandung lebih Banyak dari Prianya. *Pikiran Rakyat*. May 21, 1975.